

巻 頭 言

平成26(2014)年3月、厚生労働科学特別研究事業として実施された難治性疾患実用化研究、腎疾患実用化研究、慢性の痛み解明研究の研究成果が、「難病制圧に向けて — アカデミアにおけるイノベーション創出の現状と展望 —」と題し、同年度の厚生労働科学特別研究事業 進捗管理班主催の成果報告会において発表され、議論された。本誌は、その内容を講演録として収載したものである。

厚生労働科学研究・難治性疾患克服研究事業は、難病の克服と制圧を目指して平成24年度から始まった国家的事業である。その特徴は、厳格なマネジメントの下で実施される戦略的イノベーション創出研究であり、短期間に数多くの実績を上げてきた。

平成26年度事業としては、本誌に収載した成果報告会開催の時点で126課題が進行中で、その内訳は難治性疾患実用化研究112課題、腎疾患実用化研究8課題、慢性の痛み解明研究6課題であった。それらの内容には、前臨床研究(薬物探索や動物実験)、臨床研究ステップ1(臨床治験実施のための薬品の安全性試験や製品供給確保)、臨床研究ステップ2(実際の医師主導治験の実施)を軸に、移植用細胞や医療材料の開発、ロボットや医療機器の臨床応用、更に研究を推進するための難病の登録システム、遺伝子などの生体材料の収集と活用のネットワーク事業なども含まれており、それぞれの最新の成果がこの成果報告会で発表され、議論された。

本成果報告会開催の目的は、全ての研究課題の研究担当者が一堂に会して、国民の皆様はその成果を報告すると同時に、研究者間の交流を深めることであった。その趣旨に沿って、シンポジウムには、難治性疾患実用化研究の中から実用化のゴールが見えている課題を取り上げた。腎疾患実用化研究、慢性の痛み解明研究、遺伝子検査全国ネットワーク構築のシンポジウムでは、研究の現段階と今後の方向を発表していただいた。

希少疾患が多い難病の研究と治療法の開発には、患者さんとご家族のご理解・ご協力、並びに国民からの力強いご支援が必要不可欠である。今回の報告会には研究者だけでなく、患者さん、ご家族や支援者を含めて、多くの皆様に参加していただき、積極的に議論にも参加していただいた。それらの成果と議論の記録を本誌に収載できたことは望外の喜びであり、改めて関係者と参加者の皆様にお礼を申し上げたい。

葛原 茂樹

鈴鹿医療科学大学看護学部 教授

厚生労働省 難治性疾患実用化研究事業 プログラムディレクター